

## 『九六〇年のレオンの聖書』冒頭挿絵を巡って

### 二つの「荘厳のキリスト（マイエスタス・ドミニ）」と福音書記者像

毛塚実江子（早稲田大学）

十世紀スペインの写本の作者として名を残すフロレンティウスは、二つの「荘厳のキリスト」の挿絵を残している。一つは九六〇年にスペイン北部レオン地方で制作された聖書（以下『九六〇年の聖書』）の巻頭を飾り（León, Archivo Capitular de la Real Colegiata de San Isidoro de León, Cod.2., f.2.）、もう一つは九四五年に制作された『大グレゴリウスによるヨブ記註解』（以下『ヨブ記』）の冒頭に配されている（Madrid, Biblioteca Nacional, Cod.80., f.2.）。二つの挿絵は、構図や装飾など全ての表現方法において大きく異なり、極めて対照的でさえある。『九六〇年の聖書』では、装飾文様の枠の中に五つのメダイヨンがあり、聖書を携えたキリストをその中央に、巻物を開く福音書記者がそれぞれ四隅を占めている。『ヨブ記』では、二天使を戴く巨大なメダイヨンの中に、さらに別の二天使に囲まれたキリストが顕現し、その下方には車輪に乗った福音書記者が聖書を持ち会話をしているように描かれている。先行研究では『九六〇年の聖書』にはカロリング朝系列の写本の影響が指摘されているのに対し、『ヨブ記』はイスラム的な要素が多く、当時の黙示録写本からの影響も濃厚であるとされている（ウィリアムズ）。図像表現の違いが著しいため、これらの挿絵は影響関係の指摘という点で説明され、個々の図像に関しては主題以上の意味の追求は、ほとんどなされてはこなかった。しかし、同じ作者による同主題の作例において、なぜこのような差異が生じたのか、とりわけ後に作成された『九六〇年の聖書』がどのような意図でそれらの図像を配したのかという点に関しては再考の余地があると思われる。本発表では『九六〇年の聖書』写本研究の立場から双方の挿絵の比較を行い、改めてその差異を考察したいと考えている。その方法として、まず、それぞれの「荘厳のキリスト」の福音書記者の表現を取り上げる。『九六〇年の聖書』では全身が獣のシンボルで表された福音書記者が描かれているが、同写本の福音書記者像は、『ヨブ記』と同様の伝統的な獣頭人間型が主流である。このような二種類の表現が混在する作例は『九六〇年の聖書』が最初であり、その変化に「荘厳のキリスト」の福音書記者像が影響を与えたのではないかと推定される。それらの福音書記者の配置においても『九六〇年の聖書』では通常と逆方向に配置されているかのように見える。これも同写本や『ヨブ記』との図像比較をすれば、それぞれが左右二つずつ対になるように配置されている可能性が考えられるだろう。さらに、『九六〇年の聖書』のキリストの、あたかも二冊の聖書を持っているかのような衣の表現について補足する。最後に、「荘厳のキリスト」という本来福音書の冒頭を飾るべき主題が、『ヨブ記』そして『九六〇年の聖書』という旧約聖書の挿絵が多い写本に添えられた意味について、同時代の聖書の作例と比較をしながら考察を加えたい。